



## 小笠原諸島での小児アレルギー疫学調査～島嶼医療と研究～

☆推薦文☆ 岡田先生は、南洋の島、小笠原で子どもたちを診療するなか一つの疑問を抱き、仮説を立て、そして実証しました。さらにその論文が一流雑誌に掲載されました。私が特に感心したのは、仮説を立ててからの動きのはやさです。島の子どもの全数調査では、倫理委員会への申請に始まり、ご家族のみならず行政や教育機関との調整、資金の調達など、多大な労力が必要です。それを短時間でまとめ上げたところに岡田先生のバイタリティと能力の高さが表れています。また、岡田先生は、本論文を投稿する以前、すでに二編の英文症例報告も執筆済みでした。さらには現在義務履行中の新島でも、新たにフィールドの研究を仕上げ、驚くことに、米国で開催された最も大きなアレルギーの学会のひとつに単身で参加し、結果を発表してきました。義務年限中の派遣の先々におけるこれだけの華麗な仕事ぶりは、医学生や若手医師の素晴らしいお手本です。  
自治医科大学小児科学 熊谷秀規

### 都立小児総合医療センター 総合診療科 岡田祐樹（東京 31 期卒業）

#### 1、はじめに

私は東京都 31 期卒の岡田祐樹と申します。まず初めに、このような機会を与えて下さった小児科学の熊谷先生に厚く御礼申し上げます。東京都の卒業生には卒業後 4 年間の離島勤務が義務付けられており（厳しい！）、現在最終年の島勤務が終わろうとしております。ようやく終わりを迎えるんだなあと感慨にひたっていた折、上記テーマでお題を頂きましたので、この研究テーマ及び出版に行きつくまでの経緯も含め執筆させて頂きます。どちらかと言うと後輩たちに読んでもらい参考になればと思います執筆致しました。最後までお付き合い頂ければ幸いです。



#### 2、自分と論文との出会い

学生時代は勉強よりも遊んでばかりで成績は下から数えた方が早く（笑）、働き始めてからも研修医の時にアタック 25（テレビ朝日系列）に出場するなど、仕事も大事だけれどアフター 5 は趣味の時間も大切にしたい、そう考えていた自分の転機となったのは恩師である自治医科大学心理学の元教授であり、囲碁部の顧問でもあった高野先生の飲み会での一言でした。

『絶対に学位は取っておいた方がよいよ。何かの時に役に立つから』

当時は全く意味が分からず、現在もまだありがたみが分からないままですが、とりあえず師である高野先生が言うなら間違いないと考え、学位を取るべく小児科学の研究生になりました。

#### 3、研究生として

とりあえず研究生にはなってみたものの、当時は原著論文を英語で書くなどという作業は当時の自分にとっては想像もできず、また、島初年度という事もあり約一年間は研究らしい研究もできず棒に振ってしまいました。そんな折、当時の小児科学教授だった桃井先生に研究テーマについて相談した所、『離島であれば疫学研究が良いのでは』というアドバイスを頂きました。また、小笠原で診療を行っていた際に、喘息やアトピー性皮膚炎の子どもの割合が少ないのではないかと clinical question を持っていました。その点を、当時自分が所属していた都立小児総合医療センターアレルギー科医長の赤澤先生に相談した所、『アレルギー疾患の疫学調査をやったらどうか』とアドバイスを頂き、上記を研究テーマに決めました。

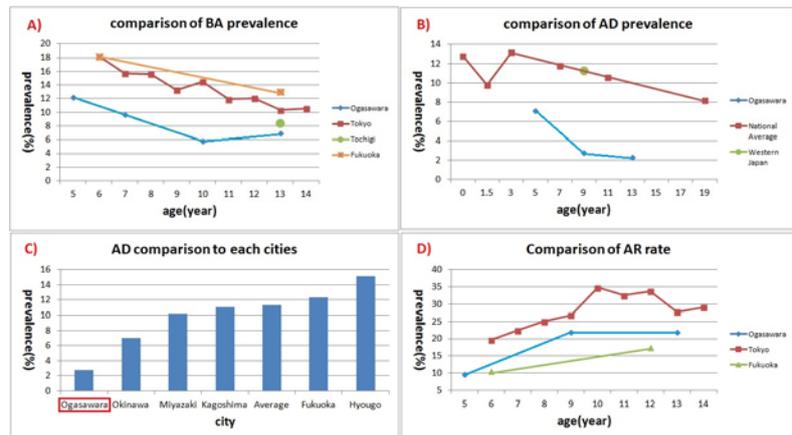
## 4、小笠原諸島での小児アレルギー疫学研究

### 4-1 研究概要

簡単に説明させていただくと、小笠原村は人種や食生活はほぼ同じである一方、亜熱帯地域に属しており環境は異なります。このような条件で、小児アレルギー疾患有症率を調査しました。小笠原村の保育園～中学生までの全数に対し質問用紙を用いて調査を行った所、小笠原村における喘息及びアトピー性皮膚炎の有病率が東京都や全国の同年齢の児と比較して有意差を持って低い傾向にあった！その要因として環境の違いや運動習慣の違いを考察で述べています。

詳しくは下記を見て頂ければ幸いです。

[http://www.allergologyinternational.com/article/S1323-8930\(15\)00147-1/abstract](http://www.allergologyinternational.com/article/S1323-8930(15)00147-1/abstract)



### 4-2 投稿から受理まで

どこの雑誌に投稿するかに関しては全然見当もつかなかったのですが、Allergology International (IF 2.5) に狙いを定め、投稿した所、Major Revisionで返事が返ってきました。当初はルールが分からず、ダメなのかと思いましたが、Major Revisionはむしろ、しっかり指摘された箇所を直せばacceptになるという事もこの時初めて知り、1回のReviseを経て何とか受理されました。また、preferred reviewerやnon-preferred reviewerの概念が分からず、松原先生に泣きついた事もよく覚えています。松原先生、本当にありがとうございました。

### 4-3 苦労した点

今回の研究で起草から出版までの流れを簡単に示します。

- 研究プロトコルの作成
- 他の先行研究の調査
- 各種書類の作成
- 実際に配布するアンケートの作成
- 倫理委員会の開催
- 研究協力のための挨拶回り (村、学校)
- 印刷、配布、回収
- 集計
- 統計学的解析
- 論文の作成 (日本語)
- 論文の作成 (英語)
- Figure、Table、Reference の作成
- 指導教員による添削
- 投稿前に Author Guideline を読み、投稿規程に沿うようチェックする
- 投稿
- Revise
- 再投稿
- 受理
- 受理後のやりとり

こう振り返るだけで、いかに論文を作成するのが大変かという事が分かりますね。どの段階も大変でしたが、特に大変だったのはアンケート回収したものをエクセルに打ち込む作業（31 質問×350 人分!!）、統計学的処理（統計に関しては当時全くの素人）、論文の英訳（英語は別に得意でない）でした。それぞれ、母島診療所のスタッフ、小児総合医療センター臨床研究支援センターの森川先生、そしてお忙しい中素早く何度も赤ペン先生をして下さった熊谷先生には感謝の念に堪えません。

## 5、振り返って

色々と苦労しましたが、こうして実際にインターネット上で掲載されたものを見たり、印刷したものをみると感慨も一入です。こんなに大変だったのに、機会があれば不思議と次また書いてみたいという気持ちになっています。今回の経験を糧に今後の診療に活かしていきたいと思っております。

後輩の皆さん、地域には面白いネタが沢山散らばっています。アイデアはあるけど論文なんて自分には…と考えている方、論文には興味があるけど、アイデアが…と考えている方、是非CRSTに相談してみましよう！きっと道しるべとなってくれるはずですよ。皆さんも、へき地で働きつつ論文を書く、なんていうちょっとカッコイイこと是非やってみませんか！？

## 6、謝辞

最後になりますが、自分が現在この立ち位置にいるのは東京都の大先輩で産婦人科教授であり、CRST 代表も務めていらっしゃる松原先生、同じく東京都の大先輩で現在は東京都庁で医療行政に携わっている田口先生なしでは考えられませんでした。誠にありがとうございます。

また、現在赴任中の新島で半年間一緒に働いた高橋宏瑞先生（順天堂大学から派遣）も論文を沢山書いており、執筆活動において刺激を受けた点も記載しておきます。今後とも切磋琢磨していきましょう。その他にも沢山の諸先生方、小笠原村からのサポートがあってこそ、今回の論文が financial support なしでこのような形に出来たと思っております。厚く御礼申し上げます。

### ！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介します
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先:地域医療オープン・ラボ [openlabo@jichi.ac.jp](mailto:openlabo@jichi.ac.jp)

[発行]自治医科大学大学院医学研究科  
地域医療オープン・ラボ運営委員会  
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1  
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail [openlabo@jichi.ac.jp](mailto:openlabo@jichi.ac.jp)  
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>